

私のビオラ育種

トキタ種苗株式会社 大根研究農場

秋山 泰男

育種の目標を立てる

私は育種に携わっていたが、ビオラを手がけるのは今回が初めてである。なにぶんビオラ育種に関する知識が乏しかったため、手探り状態から始めたのが現状である。

その当時 F₁ 品種が出回っていたが、アルペン系（シンジェンタ）等を除き、ポットパフォーマンスを重視したコンパクトなビオラが主流であった。その中で新しいかたちを模索していたが、ビオラが本来持つパフォーマンスをどこまで最大限に引き出すことができるかを考えた。その当時ペチュニアの世界では、サントリーのサフィニア、キリンウエーブ等、匍匐性野生種を利用した品種が現れ、利用者する側はその圧倒的な生命力に惹かれていた。

育種において目標を立て、素材を選び、育種方法を考える時が一番面白く、思いついた時が私にとって至福の瞬間でもある。そこでビオラで育種素材を探していたところ、あるカタログに *Viola tricolor* の亜種である *macedonica* を見つけた。*macedonica* は黄色の単色で匍匐性はあるものの、開花の遅い、春咲き性で、そのままでは園芸的に使うのは難しい。そこで現在の秋咲き性で、多種多様な花色を持つ品種を交雑させて後代を選抜していくことを考えた。交配、選抜をしていくに従い、ビオラはかなり手ごわいものであると気づかされた。

macedonica は先に述べたように黄色の単色である。それに単色でアントシアン系の色素をもつ或る系統を掛け合わせたところ、当然 F₁ は単色になることを想定していたが、なんと上弁のみがアントシアン系の色素をもつ系統を生じた。側弁、唇弁には色が乗らなかったのである。

そういえば *macedonica* は *V. tricolor* の亜種である。*V. tricolor* は誰でも知っている三色スミレでありパンジーの主要な原種でもある。何気なく当たり前だと思

っていた花色、実はかなり特殊な遺伝様式を持つ。また赤色系、桃色系の花色を導入することに苦労した。なかなか冴えた色が出てこない。新しい花色を導入する際、パンジーとの交配も試みたが一部種子の採れる組み合わせもあった。いわゆるビオラとパンジーは染色体数が異なるとされているが、対合する染色体があり、その中で生き残る个体があるのか、不思議な現象でもある。その場合花粉稔性、採種効率に気配りしなければならない。

次に草姿である。先に述べたようにあまりにもポットパフォーマンスを重視し、コンパクトになった現在のビオラである。目標を、完全なる匍匐性ではなくマウンド型の横張り性とした。完全な匍匐性もそれなりの使い方があがるが、株の周りに花が付き、中心部には花が付かないことがよくある。そのため株全体が花で覆われることを主題に育成した。またこれは店先で枝が絡み合わないこともひとつの利点である。ポットで購入し、その後グッと株が張る。春には株が35～40cm 位には張る。

もうひとつの重要な目標は早生性である。今日本では、ほとんどのパンジー及びビオラは秋に花付きポット苗として販売される。そこでいかに早生性の血を入れ、どの時期に選抜すれば一番効果があるかを考え、選抜を行なった。

野生種を利用する場合基本的には、花色が野生型で優性の場合、花色が劣勢の園芸品種に掛け合わせ、野生種の草姿なり特徴的な性質を選抜し残し、遺伝的に劣勢の園芸品種の花色を、F₂ 以降に選抜することを行なう。

今回ビオラの場合、必ずしも野生種が花色遺伝的に優性ではなく、多少変則的な遺伝様式をしたのが多少手間取った。

ビオラ「F₁ シャングリラ」シリーズ

こうして生まれたのが、当社育成の早咲き、横張り

性ピオラ「F₁ シャングリラ」シリーズである。

2006年から販売予定であるが、ローズ、イエロー、パープル&イエロー、パープル、ホワイト、レッド、ビーコン、パーブリッシュローズの8色をはじめに発表する。今後、毎年色幅を増やしていくつもりである。

秋咲き性で横張り性もあるため、7月中下旬に蒔けば9月下旬～10月上旬には十分出荷可能である。普通、コンパクトな早咲き系は株が出来ないうちに花が咲いてしまうことがよくあるが、「F₁ シャングリラ」は花を付けながらも株が張ってくる。この時期に苗を植え込めば11月には株張りが20cmを超え、春にしが味わえないようなパフォーマンスを秋から楽しむことができる。もちろん8月蒔きの普通栽培も可能である。選抜場所が埼玉県北部で、夏の酷暑下の育苗、あるいは冬場の北西の季節風にも耐える。春先に株がだらしく立ち上がらないことも特徴である。

利用は、花壇植えはもちろんであるが、コンテナーの中心に比較的丈の高くなるものを寄せ植えしてもバランスが良い。

花の育種に携わって

なにぶん当社は、元来野菜の会社であり、花の育種を始めてから7年の歴史しかない。育種はもちろん、種子生産で海外にも飛ぶこととなる。その国々の文化気候にふれ、採種会社のレベルの高さも知ることとなる。また試作依頼で生産者の方々のところにおじゃまし、生産技術、アイデア等、日々教わっているところである。

その他、育種品目としては、キリンビール社と共同開発したカリブラコアの「イルミネーション」シリーズ、耐寒性の強いマーガレット咲きのカレンジュラ「ファッション」シリーズ、花壇用ニュータイプのナデシコ、切り花では極早生でボリュームのあるユーストマ「ジュリエット」シリーズ等を手がけている。

私は花の育種に携わって10数年たつが、上記の作物に加えミニクラメン、プリムラ、ケイトウ、ダリア等の育成経験がある。はじめはセンスに頼っている部分があったが、ようやく、システムチックな育種ができる入り口にたどり着いたところである。

育種はある目的をもってF₂以降固定しやすい選抜が必要になる。いや初めに、より後代で固定しやすい交雑を行なう必要がある。ただしラッキーに予期せぬものが選抜できることもあるにはあるのだが。

育種は釣りにも似て、ある仕掛けをし、目的のものを釣り上げるようなものである。また、たとえが悪いが、相手の出方を見、素材をすばやく取捨選択し、目的をもって手作りをすることから、マージャンにも似ている。交配しているとその遺伝様式が分かった時に飛び上がらんばかりの興奮をおぼえる瞬間もある。

私の場合、メジャー作物でその周辺の野生種を利用して育種を行なうことが多い。ピオラ、ユーストマ、カレンジュラ、ダイアンサスしかりである。植物にはそれほどドマニアックではないので、花葉会幹事長の長岡氏をはじめとして、会員皆様の知識には頭が下がる思いである。

育種に携わっていると奇妙な思いにふける。実際交配していると、この花同士は交配されることを望んでいるのかということである。実はいやがっているものを無理やりくっつけているのではないか。私はあまり奇形を望まない。その植物がもっている最大限のパフォーマンスを引き出すことに興味がある。

これから育種を始める人にとって、最初はあまり難しく考えなくて良いのかもしれない。私も先に述べたようにセンスから入った人間である。プロのブリーダーが思いも付かぬ組み合わせがあるものである。とにかくやってみなければすべては始まらない。後は注意深く観察し、理論の構築をすることである。もちろん書物からも知識が得られる。いつも疑問を持って考え、網を張って読むと、文献はすばやく読み、また新たな実を持った実践的な知識と結びつく。

また今までの経験には無駄なことは無いように思える。すべてがこの年になってさまざまに結びついてきたように思える。実際見てきたもの、人のなにげない一言、これらが、今思い起こせばようやく意味がわかってきた。

実は私は40歳を過ぎてから花の栽培に興味を得た人間である。山登りしながら、自然の植物写真を撮ることには興味があったが、やはり花を作ってみると、ある種、育てることに喜びを感じる。今では、私の庭、部屋の中は、植物であふれている。花を見ていると、不思議に心が躍らされる。自分の作った花なればなおさらである。

今までは、西洋的草花を中心にバタ臭い育種をしてきたが、今後は和花にも挑戦したい。日本人と欧米人が選抜したものはまったく異なる特徴があり面白い。海外向けはもちろん続けていくが、これまでの目標、

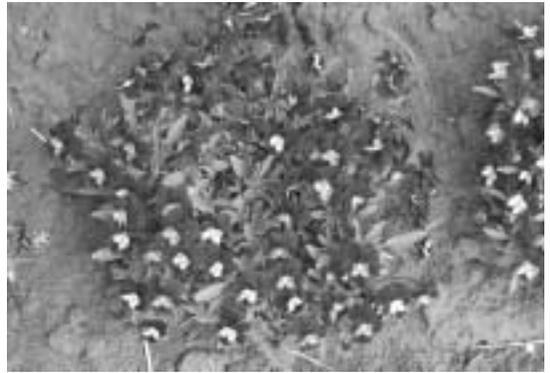
選抜で良いのか、もう一度視点を変えてみたい。そのためには自分の感性をもう少し磨きたい。

私も花の育種の魅力に取り付かれてしまったひとりである。今後どのような作風になるのか楽しみでもある。育種って面白く、かつ魔性を秘めてもいる。

ビオラ F₁ シャングリラ シリーズ



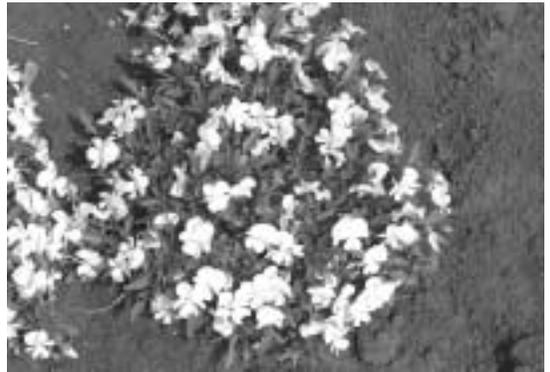
ビオラ F₁ シャングリラ **ローズ**



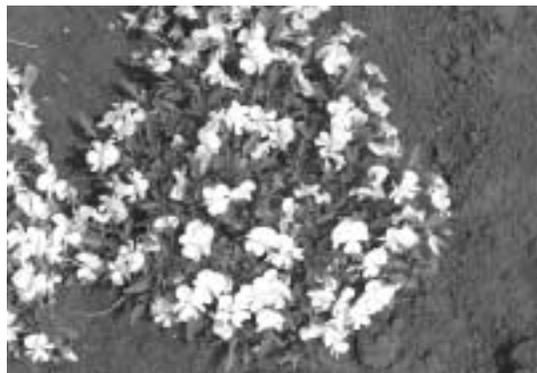
ビオラ F₁ シャングリラ **パープル**



ビオラ F₁ シャングリラ **パープル & イエロー**



ビオラ F₁ シャングリラ **ホワイト**



ビオラ F₁ シャングリラ **ビーコン**